乾元山の滝

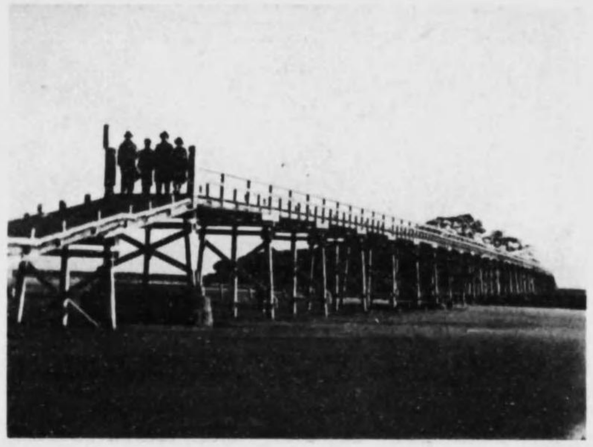
上林村字乾元山

814

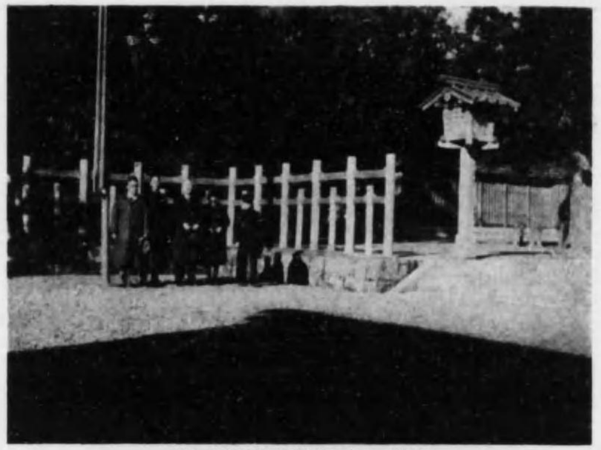
特250
814

南九州の旅

青島海岸(宮崎縣)より日の出を拜す



青　島　棧　橋



てに前宮神崎宮社大幣官

てに前（内市崎宮）廟清景

（外市崎宮）社神目生

青島熱帯植物園

てに前居鳥社神鳥青

高千穂峰遠望

（霧島神宮參詣の途中にて）

官幣大社霧島神宮前にて

官幣大社鹿兒島神宮前にて

故島津齊彬公銅像

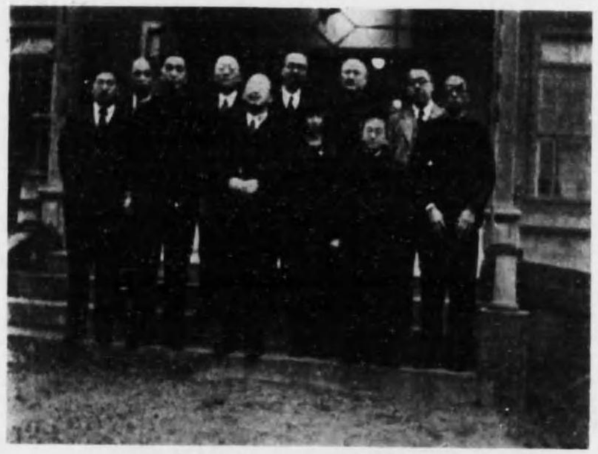
（鹿兒島照國神社境内）

鹿兒島城山南洲翁洞窟

同上記念碑

南洲翁終焉地記念碑

王子製紙會社坂本工場にて

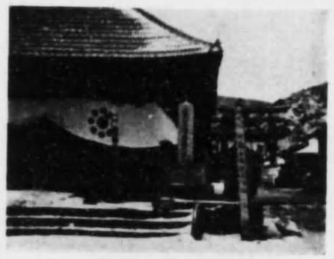


王子製紙會社八代工場前にて

(內市島兒鹿)墓之人上照月僧王勳

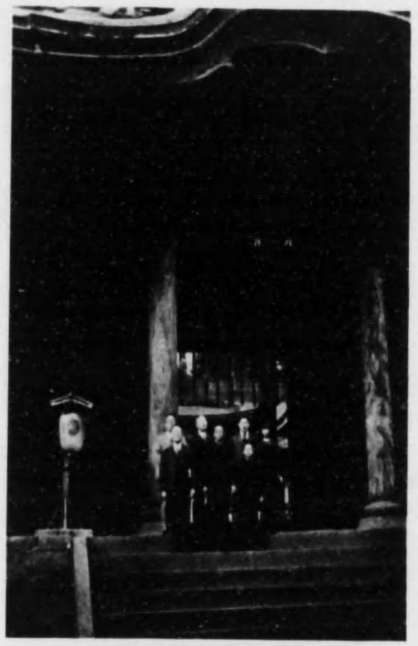
鹿兒島城山より櫻島を望む

舊薩藩砲臺跡記念碑



阿蘇山上奥之院

阿蘇山上山之上神社



官幣大社阿蘇神社樓門にて

阿蘇山噴火口にて

上　　同

同上噴煙の光景

南九州の旅目次

はしがき
一　門司より宮崎……二
二　青島見學……四
三　宮崎神宮……八
四　景清廟……一〇
五　皇宮屋……一三
六　生目神社……一四
七　霧島神宮……一四
八　隼人塚……一九
九　鹿兒島神宮……二〇
十　鹿兒島市……二三

目次 畢

十一 王子製紙會社坂本工場……三〇
十二 球摩川附遙拜の瀨……三一
十三 王子製紙會社八代工場……三三
十四 熊本より戸下溫泉……三三
十五 阿蘇登山……三四
十六 阿蘇神社……三八
十七 歸京……四〇

南九州の旅

一柳南峰編

はしがき

先年九州地方の北半部を遍歷したが、南半部が殘つて居る。然るに熊本縣下には我が王子製紙會社の八代、坂本兩工場があるので、之を視察する序に南九州地方を見學せんと志し、今玆昭和十一年の正月休みを利用し、三兒を伴れて東京を出發した。之れで自分が帝國版圖內足跡を印せぬ地方は琉球、朝鮮、臺灣のみとなつた。以下七日間に亘る南九州見學の大要を錄して後日の記念とする。

本書冒頭の寫眞は例に依つて拙兒直方の撮つたものであるから、其拙劣なるは固よりである。

一月一日　晴　午後一時三十分特急櫻號にて東京驛を發す。

余等の乘りたる車室には、恰度明石第一銀行頭取、牧田三井鑛山會社々長、漆山三井合名會社參事等の紳士諸氏が同乘して居られ、明石、牧田兩氏は何れも家族同伴で

隨分賑やかであつた。兩氏は三州蒲郡へ赴くとて、豐橋驛にて下車せられ、漆山氏は伊勢參宮をするとて名古屋驛にて關西線へ乘換へられた。

一　門司より宮崎

一月二日　曇　午前八時下關に着した、此處へ王子製紙小倉工場の井澤係長が迎へに來られ、大に便宜を得た。

午前八時十五分、關門聯絡船長水丸に搭し、同時三十分門司驛に着いた、直ちに日豐線により午前八時四十五分發宮崎に向つた。時に旅客雲集各等共滿員にて、二等車内にも澤山の立坊が出來た、之れは宮崎地方が此邊からは新年の惠方に當ると云ふことで、宮崎神宮へ參拜する人が多い爲めと云ふことであつた。余等は幸ひに小倉工場の中川君に依つて座席が先占されてあつたので、漸く立坊の難を免れた。

津久見驛(臼杵の先き)と日代驛間には、線路の兩方面に、蜜柑山が連續して居り、恰度紀州有田の蜜柑山に彷彿して居る。但し有田の蜜柑山は當初、肥後の八代から、其苗を移植したものと云ふことであるから、此邊の方が本場の樣に思はれる。臼杵

驛を通過するとき、車内より市中を遠望した、臼杵は我越智族の同系稻葉一鐵の後裔たる貞通侯より現子爵順通氏に至る迄の舊藩地である。美濃に於ける一鐵の城趾や、其他の史蹟は、我郷里大垣の近郊にあり、又先年同子爵に會見したることもあるので懷舊の感深きものがあつた。

延岡驛前には旭ベンベルグ會社のレーヨン工場が宏大なる構を以て屹立して居る。

富高驛附近の線路側には「神武天皇御着船靈蹟」と題せる標札が建て居り、美々津驛の附近には「神武天皇御船出靈蹟」と題せる標札が建つて居る、即ち前者は神武天皇が御東征の爲め宮崎を出て此地に御着船し給ひし所、後者は更に此地を發して本州に向はせられし御發船地なりと拜察する。

午後五時廿七分宮崎驛着、細雨降りつゝ有り、廣瀨旅館より出迎の自動車に乘つて青島へと向つた。途中大淀川の長橋を渡る、此橋は橘橋と名づけられ混凝土造にて亘長約二百十一間あり、地方には稀に見る立派なものである。

午後六時過ぎ青島の對岸に着き、廣瀨旅館支店に投宿した。

三日　晴　未明に起き出で、松林の中を過ぎて海岸に出ると、長い棧橋が青島へかゝつて居る。恰度相州江の島の樣である。島は江の島より小さいけれども、棧橋は江の島よりも餘程立派である。此橋は明治四十年皇太子殿下行啓ありし時に架せられたと云ふ由緒があり、彌生橋と稱されて居る。

青島は周圍僅に十四町餘、面積四丁餘歩に過ぎないが、全島無數の熱帶植物を以て蔽はれ、恰も南洋にでも行つた樣な感を起さしめると云ふので有名である、其繁茂する主なる植物はビロー(棕梠科)—クワズ芋、ムサシアブミ(天南星科)、サフランモドキ(石蒜科)、ヒギリ(馬鞭草科)、ハマグルマ、ヌマダイコン、アキノノゲシ(菊科)、ヒナギキヤウ(桔梗科)キツネノマゴ(爵狀科)、ハダカホーヅキ、キンギンナスビ(茄科)其他百數十種ありと云ふ。就中ビロー樹は島の周圍に壯大な形を以て簇生して居り、如何にも偉觀を呈して居る。

ビロー樹が此島にどうして生へたかと云ふ事に就ては、學者の說として、其初め南洋諸島のビロー樹の種子が海上を吹き送られて、自然に繁殖し、多年の間にビロー樹は島固有の植物を壓倒して、今日の樣に繁茂したものであると云ひ、又一說には、古代から廣く分布して居たものゝ遺物であるとも云はれてゐる、何れにしても、此島には珍らしい植物を抱容してゐる。

又此島の地質は、第三期層の砂岩と、泥板岩との岩層とから成り、其上を第四期沖積層に屬する土砂、殊に貝殼の碎片に依つて覆はれた部分に、植物が生へて居ると云ふことである。而して其第一層は多くの龜甲形と菱形の岩盤によつて組み立てられ東へ廿五度の角度で斜層をなし、幾百となく並び岩の連波となり、實に珍らしい形をなして居る。

右の如く此島は、熱帶植物自生地として地質學上好適の資料として、內務省より大正十年三月天然記念物に指定せられ、特別の保護を加へられて居る。

余等は先づ島の中央青島神社に參詣した。此神社には彥火々出見尊、豐玉姬命、鹽筒大神の三神が合祀せられてある。

此島に付ては、種々の傳說があるといふことである、今其內聽く所の一、二を揭ぐると

一、此島は神代の龍宮で海神の宮居であると云ひ傳へられて居る。

青島神社所藏の豐玉姫御婚禮の繪圖の上に、次の如く題してあるとのことで、是等も亦所謂龍宮を青島であると信じ、「鴨つく島」も蒲葵茂つて、巨松天を衝く彼の地であると、信ぜしめた一つと云はれて居ると云ふことである。

御詠　奥きつ島軻茂豆句志摩にわかいねし、いもはは、すれし夜のこと〳〵に

赤たまは緒さへひかれと白玉の、きみかよそひし尊くありけり

二、青島は上古淡島と言つたと傳へられ、又齒朶の浮島とも云はれて居る。

齒朶の浮島は、鹽筒の翁が彦火々出見尊を目無の籠に齒朶の葉を敷いて龍宮に送りまゐらせたと古傳說に出づるものである。

三、太古、彦火々出見尊、火照命の鈎を失はれたるに困じ鹽筒翁の言を用ひ、龍神の力をからんとて、龍宮に御渡幸、御在島二年で其目的を果し、本國に御還幸の際、第一に御上陸ありしが即ち此島である、依て此處に三神を合祀して其威靈を傳ふると云ふ。

青島神社の參詣を了りたる後、鳥居前の波打際にて旭日の登天を拜し社務所を訪ひて、所員の案内を乞ひ、社の右側にある林内を見學した、柵の入口には「御成道」と云ふ標示があつて、林内一直線に二十間許りの小逕が混凝土で舗裝されて貫通して居る、之は明治四十年、皇太子殿下行啓の時、林内の狀況を台覽に供する爲め、始めて開かれた御成道で、常には柵を閉ざしてある、此道筋には、ビローの林、クマタケラン、クワズ芋、鐙に似たるムサシアブミなどが生へ茂つて居る。

次に、鳥居前に熱帶植物園がある、早朝なれば、まだ監理人が出勤して居らぬと見え、開門されて居らぬから、社務所へ斷り、其裏から入園して參觀した、バナナの結實せる實況も見られ、其他種々の植物があり、參考室には檳榔樹と蒲葵樹とを比較した實物標本が陳列してある、又最近迄に時々此島に漂着せしと云ふ熱帶植物の果實抔が陳列してある。

園内を一巡した頃漸く監視人が出勤して開門した、園内に物產品の賣店があり、監視人はその賣店員であつた。

紀念の爲め二三の物產品を求めて此處を去る

旅館に歸れば、自動車が待ち受けて居る、仍て早々朝食を濟し直ちに乘車して宮崎に向つた。

青島にて詠める歌

びろう樹の枝葉しけれる青島の

波うちきはに朝日迎へぬ

尙青島の先きに、鵜戸神宮があるけれども時間がなき爲め參詣する事が出來なかつたのは遺憾であつた。

三　宮崎神宮

宮崎市に入り、先づ宮崎神宮に詣づ、社頭にて紀念撮影をなし、次で徵古館を參觀した　宮崎神宮の祭神は、神武天皇であらせられる。當神宮鎭座の由來を聞くに、斯の地は古史に所謂高千穗宮なる皇居の靈地であつて、神武天皇東遷の雄略を起し給ひし遺跡であると云ふことである。

神武天皇は、御年十五にして皇太子に立ち給ひ、宮崎に都を開き、宮崎宮に坐して天下を治め給ひしが、御年四十五の時東遷の事を思ひ立たせられ、皇軍を帥ひて宮崎の宮を出立ち給ひしは紀元前七年十月五日であつた。

宮崎より豐後國に到る御順路は歷史に詳でないが口碑の傳ふる所によると宮崎より北行して、美々津に至り、此處より乘船し給ひしものゝ如くである、此處に、立磐神社ありて、境內に、天皇東遷の際御少憩し給ひしといふ腰掛石があるとのことで

ある、其後御年五十三の時、大和の橿原の宮に於て御即位の大禮を行はせ給ふたのである。

本宮社殿の創立は、神武天皇の皇子神八井耳命の孫、建磐龍命筑紫の鎭守たりしとき、此地即ち高千穗宮の遺跡に就きて、社殿を創建し給ひしに起るといふ、降つて人皇十代崇神天皇の御宇、又十二代景行天皇熊襲征討の節、造宮の擧あり、尋いて十五代應神天皇の御宇、日向國造老男命之を鎭祭し、八十二代後鳥羽天皇建久八年地頭土持太郎信綱、宮殿を造營して遷座の式を行ひ、百七代後水尾天皇寛永二十年領主有馬康純宮殿を造營し、百十八代光格天皇文化十八年八月內藤龜之進、又造營し、百十九代仁光天皇天保十年十月內藤政義造營し、明治十九年三月更に社殿を改造ありしが、明治三十年神武天皇御降誕大祭會組織せられ、二條公爵、高木男爵等會務の進行に努力し、國庫の補助金、帝室の御下賜金及び同會募集の寄附金とを以て、宮殿其他の建物を改造又は增築し、併せて神苑擴張をなし、明治四十年九月全く竣功同年十月遷宮式を行はれたと云ふ事である。

當宮古來は、神武天皇宮と稱したが明治六年五月縣社となり、宮崎神社と稱し、同年八月國幣中社に列し、同十一年五月宮崎宮と改め、同十八年四月官

幣大社に昇格あり、大正二年七月宮崎神宮と改稱仰出されたとの事である。

徽古館は大祭會より建設寄附せしもので、二階建總坪數六十餘坪あり、明治四十二年五月卅一日開館、内には當宮寶物たる明治天皇御寄附の太刀、伊勢神宮御神寶を初め、其他の寶物及び縣下各地に散在せる古跡古墳から發堀した古器物其他歴史參考品が陳列されて居る。

宮崎神宮の社頭にて

國のもとゐさためたまひし大神の
宮居のあとゝ聞くそたふとき

次に皇宮屋へ參拜する順序なるも、巡路の都合上先づ景清廟を訪ふことゝした。

四　景清廟

景清廟は惡七兵衛景清居住の跡にあつて、小さな廟社が建てられ、其中に景清の墓がある。

墓は較〻長方形の自然石で、其上部には梵字が一字彫刻され、中央に圓形の穴が貫通されて居る、其側には靈碑が安置されてあつた。

壽永の昔、平家亡びて後、山野に身を潜めて再擧を企て居たる平家重代の武人景清は、京都の清水にて源氏に捕はれて宮崎に流され、日向勾當と稱して居つたが、建保二年八月十五日霧島漫遊の時、行年六十二歳で歿したといふ事である。

此廟社は、生目神社と共に眼病に靈驗があるとて參拜者が多いと云ふ事で、當日も相當に祈願者らしき人の參詣せるを見受けた。

人丸塚と云つて廟社の横手に人丸の墓がある、題して人丸妃墓と云ふ。

景清には人丸といふ娘があつた、景清宮崎に在住の時、父を慕ふて遙々鎌倉より尋ね來たが、建永元年九月、廿七歳で早世したと云ふ事である。

謠曲景清は、此邊の事情を基本として構作したものと思ふから、左に其首部一節を參考に摘錄する

謠曲景清

ツレ(人丸)次第「きえぬ便りも風なれば、〳〵、露の身いかになりぬらん、

ツレ、サシ「是は鎌倉龜が江が谷に、人丸と申す女にて候。　さても我父惡七兵衛景清は、平家の身方たるにより、源氏に憎まれ、日向の國宮崎とかやに流されて、年月を送り給ふなる、　いまだならばぬ道すがら、物憂き事も旅の

習ひ、また父ゆゑと心強く、

トモツレ下歌　思寢の涙かなしく、草の枕つゆを添へて、いと繁しき袂かな。

上歌　相模の國を立ち出でて〳〵誰にゆくへを遠江、げに遠き江に旅舟の、三河に渡す八橋の、雲井の都いつかさて、かり寢の夢になれてみん〳〵。

トモ詞「やう〳〵御急ぎ候ほどに、是ははや日向の國宮崎とかやに御着きにて候」　これにて父御の御行方を御尋ねあらうずるにて候。

シテ（景清）一聲「松門ひとり閉ぢて年月を送り、みづから清光を見ざれば時の移るをも辨へず。暗々たる庵室に徒に眠り、衣寒暖に與へざれば、膚は燒骨と衰へたり。」地歌「とても世を背くとならば墨にこそ、〳〵、染むべき袖のあさましや、やつれはてたる有樣を、我だに憂しと思ふ身を、誰こそありて憐みの、憂きをとむらふよしもなし、〳〵。」（以下略）

景清親子對面の昔を偲びて

遙々と親をしたひて訪ね來し

こゝろのうちぞ哀れなりける

余は少年時代より觀世流の謠曲を好み、時々謠曲名所を遍歷する趣味がある。昨春は謠曲重習の一であるところの「道成寺」の本元を紀州に訪ね「蛇身鐘捲」の銘印を謠本「道成寺」に押してもらひ、歸京後、梅若萬三郎師に就て此曲を修習した、但し頗る難曲で稽古中は冷汗三斗の感をしたが、本春は又謠曲九番習の一であるところの「景清」本人の遺跡を訪ねることが出來た、此曲も九番習中の難曲であるから、何れ近々萬三郎師に就き復習する積りである。　昔細川幽齋は謠曲十五德なるものを著したが、此名所遍歷の趣味を生ずることも、亦其一に加へてよからうと思ふ。

五　皇宮屋

景清廟を出て丶數丁、左折して側面より入り、皇宮屋（皇居趾）に詣す、此皇居趾は神武天皇の宮居し給ふた舊蹟と傳へられて居る、小丘の頂上に玉垣を廻し正面入口の傍に碑石が立つて居り、中央に小社が建てられてある。

此處を拜辭して、正面數十段の石磴を下り、自動車に復して宮崎市内を通過し、霧島に向ふ。

六　生目神社

宮崎市内を通過し進むこと里許、左折して縣社生目神社に詣づ、當社は品陀和氣尊を主神とし、藤原景清を合祀す、境内清淨にして老樹天に參し頗る幽邃である、殊に神殿拜殿共他參道共昭和九年の改築に依り一層すが〳〵しく感じた。

傳說によると景清は賴朝を刺さんとして果さず、自ら兩眼を抉つて失明した、其眼を祭つたのが此神社だと云ふ事である、古來眼疾に靈驗あり、生目八幡樣と稱して遠近よりの賽者が常に絶えぬと云ふことである。

七　霧島神宮

最初の豫定では宮崎地方の見學を終り、汽車にて都城に赴き、此處より自動車にて鹿兒島に向ふ豫定であつたが、廣瀨旅館主人の注意にて此豫定を變更し、宮崎より其儘引續き自動車に據ることにし、鹿兒島に向つた。高岡町を通過し左に大淀川發電所（大淀川水力電氣株式會社の發電所にして貳萬馬力現今九州第一の發電所と稱す）を眺めつゝ大淀川に沿ふて山路を上り、吉都線谷頭驛附近を過きくる頃より高千穗峯を東に眺めつゝ走る、本日は快晴の爲め能

く頂上を仰視することが出來た、但し天の逆鉾は望遠鏡にて幽かに其頂上らしきものが眼界に入つたが、判然しなかつた。

拙劣なれども亦一首浮んだまゝを誌るす。

仰ぎ見て神代のむかししのばるゝ
空にそひゆる高千穗の峰

彌〻進みて午後一時頃霧島神宮に到着し、直ちに洗手して參詣した、

當社の祭神は天饒石國石天津日高彥火瓊瓊杵尊と承る。

當社鎭座の由來を承るに、畏くも天孫瓊瓊杵尊は天照大神の神勅のまに〳〵、三種の神器を捧持して高千穗峯に天降ましまして、悠久窮りなき皇基を固め成し給ふた、乃ち由緒尊き靈山なるが故に、遠く神代より此の御山に鎭座ましますと傳へられて居るとの事で、延喜式内日向諸縣郡霧島神社は卽ち本宮である。

舊記に依れば

第二十九代欽明天皇の御宇（千三百八十餘年前）慶胤と云ふ人、高千穗峯と火常峰（御鉢）との中間背門丘（天の河原とも云ふ卽ち天孫御降臨の跡）に御社殿を造營したるが、山

上噴火(一書曰、五十代桓武天皇の延歴七年三月)のため燒亡せり。

其後第六十二代村上天皇の天暦中(天暦元年今より九百八十九年前)性空仙人、御鉢の西麓、瀬多尾越に社殿及別當寺を新造す、第八十七代四條天皇の文暦元年十二月二十八日(七百餘年前)山上復火を發し、社殿僧坊と共に神寶、記錄、宣命悉く燒失せり、爾後待世行祠と稱する假宮を、峰の西南約二里を隔てたる宇田口の地に建てゝ奉祀すること凡そ二百五十年間、島津十一代の國主忠昌痛くこれを慨し、第百三代後土御門天皇の文明十六年(四百五十二年前)眞言の僧兼慶に命じて現今の地に社殿及別當寺を中興す、第百十三代東山天皇の寶永二年十二月十五日(二百三十一年前)別當寺より火を發して、全燒の厄に遭ふ、第百十四代中御門天皇の正德五年五月(二百二十一年前)島津二十一代の國主吉貴重建して莊麗舊に復せり、是れ即現今の社殿なり。

初め第十八代後一條天皇の朝正五位藤原萬如(宇多天皇の皇子鳥房親皇五世の孫)霧島神社の神司として治安元年三月二十一日(九百十五年前)大隅國に下着世々曛唹郡を領し、霧島神領の租稅を司る、依て稅所氏と稱す、文明十五年(四百五十一年前)に至り島津修理大夫忠廣の爲めに逐はるゝに及んで、島津家の管領にうつれり。
爾來歷代の崇敬厚く、屢々社領奉寶をなし、或は香火田寶物等を寄進し、御造營を奉仕する等敬神の誠を致し、以て明治維新に及べりと云ふ。

明治七年二月十五日社號を霧島神宮と改定せられ、官幣大社に列せらる。

本宮はもと霧島神社又は西御在所霧島六所權現と稱しまつり、別當寺を霧島山錫杖院華林寺と稱せり、中興開山僧性空より二十一世二百八十餘年を繼承し、慶應以降(島津家管領以後)眞言宗となり三百八十年許、代々社務を掌る、慶應二年九月舊薩摩藩廳に於て神、佛混淆禁止の際廢寺となり、今はただ其の礎石を存するのみとなれりと云ふ。

弘安四年閏七月朔日蒙古入寇の時、當神宮に奉幣あり、文祿年間征韓役に、藩主島津氏の祈願等、古來皇室を始め奉り武將の崇敬甚だ厚く、奉幣數知れず行はれたりけんも、數度の燒亡によりて詳細を知るに由なしと云ふ。

當神宮は高千穗峯(海拔五、一九四尺)の臺地、海拔千六百五十尺の地點(鹿兒島市の北東十四里)にあり、現在境內面積約七十四町歩、樹木鬱然として森嚴幽邃、賽者をして自ら襟を正さしむ、島津家管領後崇仰厚く、屢々知行を增加寄進し、霧島山一圓悉く境內たりしが、廢藩置縣後、霧島山の絕頂を以て宮崎鹿兒島兩縣界を分ち、宮崎縣に屬する部分は境外となれりと云ふ。

而して霧島山は即ち高千穗峯を中心とする山岳の俗稱であつて、山貌頗る秀麗であるが、神奇異靈特に著しく、珍禽異獸奇木瑞草の類が頗る多いと云ふことである、殊に眞紅の「映山紅(きりしまつつじ)」は昔く天下に知られて居る。

霧島山は日向、大隅の二州に跨り、東西二高峰に分れて、西峰は韓國嶽又は西霧島と呼び、霧島山中第一の高峰で、高さ約五千六百尺、昔は山頂から遠く朝鮮を望み得た

とて韓國見嶽と稱へて居たさうである、東峰は即ち高千穂にして、高さ約五千二百尺其の頂に「天の逆鉾」があるので、一名矛の峰とも云ふ、高千穂の西側に沿ふて、噴起せる御鉢火山からは、常に硫氣と水蒸氣とを盛んに噴出し、今尚活動を續けて居る、山腹に桑之尾、林田、硫黄谷、明礬湯など數個の溫泉がある、通俗霧島溫泉と云ふのは其總稱である。

高千穂峰と韓國嶽との中間に新燃岳がある、高さ四千九百九十尺、有名な「霧島つゝじは、此新燃を中心として、其處此處に大群簇をなし、恰も錦繡を敷けるが如く、美觀を呈すと云ふことである。

而して此山岳を霧島と稱する所以は、抑々此山は、天孫御降臨の時、靄霧暗く、物色分ち得ないので、稻、千穂を拔き採て、四方に投散らし給へば、雲霧忽ち晴れたるにより、此名を負ひて高千穂といひ、又霧島とも稱すとかや。此の御話しを聞いて即ち一首を詠し奉る。

高千穂のくもきりはれて宮柱
高くあふきぬ神のみいつを

社頭を辭し路傍の旗亭に入りて午餐を喫した時は既に午後二時であつた。

八　隼人塚

之より隼人驛を左方に見て進めば、路傍に隼人塚がある。之れは熊襲の供養塚と云ふことで、指定史蹟になつて居るが、其掲示に左の如く誌されてある。

日本民種の發祥の地三州は帝都大和に遷りてより政令遂に及び難く爲めに熊襲の反亂相次ぎ起り朝廷屢々之を討伐す玆に於て元明天皇和銅元年七月熊襲の死靈を慰めんが爲め此處に五重塔三基及四天王の石像を建設して供養を行へり、越えて元正天皇養老四年隼人の叛亂あり朝廷之を平定したり隼人の鬼靈を又此處に合せ祀り放生會を行へり此塚は舊と「芝堤の塚」と稱せしを鹿兒島神宮祠官某熊襲塚と命名し後に隼人塚となり大正三年三月三日史蹟に指定せられたり云々。

尚國分町小川と云ふ所に、日本武尊の奇計に落ちて誅伐せられた、熊襲の首領川上梟師の巣窟跡があると聞いたが、時間の都合で見學する事が出來ず只其の昔を偲びて一首を詠した。

生ひ茂る薩摩の原のしこ草も
吹く神風になひき伏しけむ

九　鹿兒島神宮

進む事暫時鹿兒島神宮境内に着く直ちに參詣した。

神宮所在地は神代襲國(熊襲)上古の日向國であつて、薩摩大隅の國が置かれてから、後奈良朝時代以前は薩摩國に屬し、平安朝時代以後は大隅國に屬した、現在は鹿兒島縣(大隅國)姶良郡隼人町字宮内と稱するが宮内の稱は往古からで、高千穗の宮の内の義であると聞いた祭神は天津日高彦火々出見尊で其神位に就て、鹿兒島神宮誌は左の如く語て居る。

瓊々杵尊日向國に天降まして吾田の岩屋の笠狹(かゝさ)の碕(みさき)に宮居遊ばされた。此の地の國神大山祇命の御女木花開耶姫命を后に迎へられて火闌降命(ほすそりのみこと)彦火々出見尊火明尊(ほあかりのみこと)を御あげ遊ばされた。

火闌降命は海幸があり彦火々出見尊は山幸があつた、或る日御兄弟で幸を御交換なされたが御兄弟共に何も得る處がなかつたのみか、彦火々出見尊は大切な鈎を失はれた、そこで兄命に色々と謝罪され新らしい鈎を澤山作つて御返へしなされたが許されなかつた。

尊は謝罪の叶はぬ爲の困惑されて海岸に御出になつた、鹽土翁は尊の御樣子に不審を持つてその譯を伺つた、尊は御兄命とのゆきがゝりを御話したら翁は非常に御同情申し上げ、無間勝間の小船で綿津見の國に御出で遊ばされ綿津見の神に御相談なさるやう御奬め申し上げた。

翁の敎の如く綿津見の國に御着きになり、海神豐玉彦命(わたつみのかみとよたまひこのみこと)の御女豐玉姫命と御夫婦の御契りを結び御仲睦しくお過しになつた、三年の後曩に失はれた鈎と潮滿珠、潮干珠とを海神から御受けになつて御歸り遊ばされた、そして早速兄命へ鈎を返して御詫び申したが更に次ぎ〳〵難題を持ちかけられ、流石の尊も兄命の餘りの御仕打ちに止なく、潮滿珠の威力と潮干珠の靈力とを現はされたので兄命はその御威德に服されて「今から後は汝尊の俳優(わざおぎ)の民となつて長く宮門を護り奉る」と御誓言なされた、卽ち此の火闌降命の後裔が隼人族で神宮には今に至るまで隼人といふ家柄で御奉仕申し上げて居る。其御鴻業としては御父瓊々杵尊の御治世の後を受けられ肇國の基礎を愈々御確立遊ばされた、卽ち尊は三州一圓の開拓の神であり殖産、牧畜等の御指導の神にまします事は申す迄もなく又武神としての御靈德は赫々たるものがあつて、累代の藩主島津家一門の崇敬は實に篤つた。

要するに御神德は潮滿珠の勇猛果敢な武斷的威力と潮干珠の慈悲憐愍の平和的御靈力に依つて表徵されて居ると誌されてある。

而して當神の御創祀は遠く神代の昔で尊の御宮殿であつた高千穗の宮が、御社殿と爲つたのである。但し一說に神武天皇の御創建とも傳へて居る。

御社號は延喜式等には、鹿兒島神社と申し、一般的には正八幡宮、大隅八幡宮又は國分八幡と申上げた、併し此正八幡宮と申上る事については諸說が有るが、この御稱號が史籍に見えたのは、今から凡八百五十年前の事である。

御社格は延喜式内大社、大隅之一宮で、往古より日・隅・薩三州の大社として崇敬甚だ

篤かつた。

明治四年國幣中社に列せられ、同七年鹿兒島神宮と改稱官幣中社に、同廿八年官幣大社に昇格された。社殿は鎌倉以後今日迄、前後六回炎上になつた爲め、往古の事は徵するものがないが、現在の社殿は島津公二十四代、二十五代の二代に亘つて、藩の正税を以て御造營になり、寶曆六年今から約百八十年前完成したもので、其宏壯彫刻彩色の美共に九州屈指のものと稱せられて居る。

境内を辭して自動車に復し鹿兒島市に向つた。

十　鹿兒島市

午後四時半鹿兒島市に入る。宮崎より走行約四十五里。此時分から雪が散らつき出して甚だ寒く感じた。

鹿兒島市は島津氏八十八萬石の城下町であるだけに、市内到る所島津氏に因緣をもたないものはないと言つてもよい、又之れと同時に明治維新前後に於ける西郷隆盛の殘した遺跡も少なくない、今人口十八萬、街は甲突川の清流が其一角を流れて後方は、城山の綠を重ね、前方深く引入れた錦江灣には、火を噴く櫻島を浮べ、史の

國、景の都として、觀光界に雄飛してゐる。

殊に其史蹟に付ては、余の毎朝東京日々新聞に依て愛讀する德富蘇峰翁著近世日本國民史、就中最近の部に於て、其來歷を聞知せること多く、一層多大の興味を以て此史都を訪問したのである。

先づ第一着に目に附きたるは花倉と云ふ所の海岸に建てる石標である、此處は即南州翁が勤王僧月照と相抱いて海に投じた所である。

夫れより進むで、市の中央に至る順路として、先づ東端磯濱に立寄りて見學した、即ち、

尙古集成館　此處には薩藩時代の遺品や、明治維新史の參考品が多數陳列され、所謂島津文化の粹を集めてゐる、室の奥には島津齊彬、久光、忠義、三公の肖像が掲げてあつた。

此處はもと、齊彬公が軍備の充實と產業の振興を圖らんが爲め、嘉永五年に設立した製作所の跡で、文久三年七月薩英戰爭のとき、砲火のため一旦灰燼に歸したのを、忠義公が再興して爾來大正四年まで、鐵工所として機械類の製作を繼續したといふことである。

磯島津邸　仙巖園と稱し、萬治年間島津光久公の創建に係るもので、溪流泉石の配置もよろしく、綠の松の間から鹿兒島灣の靜波、櫻島等すかし見るところ、所謂天下の名園である。背後の楓谷にある竹林は、元文元年琉球より移植したものであると云ふ、これが內地に孟宗竹の移植された最初であると傳へらる。

次に進むで市の中央に入り、見學したる個所を擧ぐれば即ち左の如くである。

鶴丸城址　島津氏の居館、鶴丸城の址で、現在第七高等學校が建てられてある。周圍の濠池、高き城壁、石橋の欄干等今尙藩政時代の面影を宿して居る。

私學校址　第七高等學校と道を挾むで右側にあり、現在縣立病院となつてゐるが、征韓論に破れて故山に歸つた西鄕南洲翁が、農耕の傍ら薩南子弟訓育の爲め設けた私學校の址である。外廓の石垣には今尙十年の役當時官軍の擊つた彈痕が、歷然として當時の激戰を物語つてゐる。

薩摩義士弔魂碑　城山公園東入口にある。之は寶曆年間德川幕府政策の犧牲となつて、君命を帶び木曾川治水工事に赴いた總奉行平田靱負以下五十名の弔魂碑である。工事は餘りの難工事で過大な藩費支出を餘儀なくされ、其責を負うて工事完了と共に自分等の築いた堤防の上で全部自刄したのである。此治水工事の

現場は余が鄕里の近鄕であるから一層深き感慨を催した。

南洲翁終焉の地　岩崎谷附近にあり、明治十年九月廿四日未明、西鄕隆盛が城山背面の洞窟を出で、谷を下つて、流彈に中り遂に別府晋介の介錯に依つて此世を去つた場所である。

當時南洲翁が反軍の將となつた事は誠に遺憾であるが、然し畢竟國家の爲に盡さんとして方向を誤つたもので、陛下の爲め、國の爲めに盡さんとする忠義心は人後に落ちないものと思ふ、後日明治天皇が其罪を赦るされて贈位の恩典に浴せしめ賜ふた事によりても明らかである、余は此の意味に於て左の一首を試みた

登る道たかへつれとも眞心の
行方はおなし城山の峰

以上の見學を終りし頃、夕景に近づきたれば、本日は之にて止め、旅舍明治館に至りて宿ることとした。時に雪は歇みたれども寒さは中々甚だしい。

沐浴晩餐後丹前二枚を重ねて外出し、殷賑の街と稱せられるゝ天文館通りを散策し、名物薩摩燒を求めて歸つた。

歸館後寢に就きたるも、寒くて熟睡が出來なかつた、こんな寒さは當地近年稀なることであると聞いた。

一月四日快晴　早朝より照國神社、南洲神社、南洲翁の墓、月照上人の墓等に參詣し、其他二三の史蹟を見學した、今其路順によりて來歷の大要を誌るす。

照國神社　城山の麓にあつて、幕末の藩主島津齊彬公を祀れる別格官幣社である。公は早くから反射爐を造り、巨砲を鑄造するなど、西洋文化の研鑽に先鞭をつけ、又開國論を唱へ明治維新の端緒を開かれた英主である。城山公園を背景に九州第一と稱する大鳥居があつて、境内は探勝園と稱し、閑雅なる神苑である、其の中央の正面に齊彬、久光、忠義三公の銅像が巍然として建てられてある。

照國神社の大前にて詠める歌

大君に捧けまつりし眞心を
　したひまつりて神と仰ける

月照上人の墓　市内松原町の南洲寺にあり、月照名は忍向、京都清水寺成就院の住僧である、近衛忠熙に和歌を學び、頗る其法を得た、人となり慷慨にして國事を憂ふ、

嘉永安政以降外夷の事起るに及び、幕府屢々政を失す、月照諸公卿の間に周旋して尊王攘夷の論を唱へ、又西郷隆盛と兄弟の交りを爲す、幕府二人を忌み、之を捕へんとした、二人窃に西國に逃る、捕吏搜索甚だ嚴であつたから、御船崎に於て隆盛と一緒に海に投じた、此時平野國臣同じく船中にあり、大に駭き、舟子に命じて之を援はしめた、隆盛は蘇生したが、月照は終に絶へた、時に安政五年十一月十一日、年四十六であつた。

辭世の歌に

大君の爲めには何か惜しからむ
　薩摩の瀨戸に身は沈むとも

曇りなき心の月の薩摩灣
　沖の浪間に今そ入りぬる

余は墓前に於て左の一首を手向けた

薩摩潟身は沈みしも名は高く
　後の世までも浮ひけるかな

城山公園　明治十年の役最後の激戰地で、全山老楠が枝を交へ、今も附近からよく彈丸や遺品が發掘されると聞く園内には面白い名の木が多く、史蹟名勝天然記念物に指定されて居る、自動車にて頂上まで登り、展望臺に出づれば、鹿兒島市街は脚下に展け、近く櫻島に對し、遠く大隅半島開聞岳(薩摩富士と稱す)等の麗姿を眺め眺望第一である。

櫻島は昨日の雪で白帽を戴き白煙を吐いて居る、そこで左の一首を詠じた

こなたより呼はゝ答へむ櫻島
　雪をかむりて煙はきけり

南洲翁洞窟　城山公園を岩崎谷に向つて下る途中にあり、南洲翁が戰を他所に常に此處に起居し、城山陷落の日まで部下と圍碁など樂しまれた所と聞く。當時薩摩の烈婦が、彈雨を潛つて、食事を運んだと云ふ話なども殘されてゐるとの事である。

南洲神社と南洲翁墓地　岩崎谷より東北六、七町を走り、竪馬場通に出て、淨光寺岡に登る、鹿兒島灣市街などを一目に見下す場所で、正面に南洲翁の墓があり、其の左右に桐野利秋、村田新八以下諸將士の墓碑が竝んで居る、其下方の堂内に、南洲翁の木像が安置されてある、之れは東京上野公園にある銅像と型も大きさも同樣と見受けた。

墓地の後方に南洲翁記念館がある、時間が無いので參觀を省略した。

其の右方に南洲神社が建てられてある。

砲臺址　鹿兒島驛に近き海岸祇園の洲と云ふ所にある。之れは幕末の頃、薩藩が攘夷の魁として、英艦を擊退せし砲臺の址であり、「舊薩藩砲臺跡」と題せる標石が建てゝある。

今其當時を偲びて一首を詠じた。

薩摩潟よする黑船うち拂ひ
　とつ國人の膽をぬきける

砲臺址附近は小公園となつて居る。

其の隣に無數の小墓が並列して居る、之れは明治十年の役に於ける官軍戰歿者の墓である。

以上を以て鹿兒島市の見學を止め鹿兒島驛に至る。

十一　王子製紙會社坂本工場

午前十時鹿兒島驛發、肥薩線により坂本驛に向ふ、途中吉松にて乘換へ、人吉驛に向ふ途中、大畑驛附近の線路は同驛を中心として「ループ」線となつて居り山の頂上を汽車で一廻りした譯である、「ループ」線は本州の上越線清水隧道附近にもあると聞いたが、日本で始めて出來た珍らしい線路は此吉松線である。

吉松驛で八代の王子製紙會社山林出張所長海藤君及同會社八代工場の中村工場長代理並に坂本工場の佐藤事務係長諸君が迎へに來て呉れられた。

汽車は球磨川の沿岸を走り、左右に兩度橋を渡つた。

球磨川は九州第一の急流で、音に名高き「球磨川下り」は人吉驛附近から白石驛迄の間の川下りを稱するのであると聞いた。

午後二時三十分坂本驛着、伊藤工場長の案内で徒歩にて坂本工場に赴く、此間數丁である。　直ちに工場に入りて大略を參觀した。

當工場の所在地は熊本縣八代郡上松求麻村である。　工場は山間にあつて小川を

挾んで建つて居る。　當工場は明治廿二年東肥製紙株式會社として創設されたものので、明治卅六年九州製紙株式會社と改稱し、大正十五年四月樺太工業株式會社に合併し、更に昭和八年同社が王子製紙株式會社に合併したる結果當社の所屬工場となつたのである。

當工場には抄紙機長網百吋四臺、同ヤンキー式三臺合計七臺据付けてあるが、當日は五臺運轉して居つた、製品は各種に渉て居るが、當日は中等印刷紙、薄更紙、ロール紙、雜誌用紙類を抄造して居つた。

當工場の動力は自家發電と、購入電力によつて居る、自家發電は水力に據り、發電所は「鮎歸」と「深水」の二ヶ所にある。

出電力は鮎歸が四百八基、深水が八百八十基である。

十二　球摩川 附遙拜の瀨

午後三時四十分頃工場を辭し、附近を流るゝ球磨川を舟にて下り八代に向ふ、球磨川は急流を以て有名であるけれども此邊は頗る緩流である。

八代に着く少し手前、高田村掛に「遙拜の瀨」と云ふ急湍がある、其の名稱の來歷を聞

くに、南北朝時代征西將軍懷良親王の高田御所に在すや、毎朝丘に上りて遙々東天を拜し、父帝の御平安を祈られし因緣で此名稱が生じたと云ふことである。

此附近八代に向つて右岸の奥(宮地村大字宮地字谷)に老杉の鬱々たる森があり、此處に懷良親王の御廟があると聞いて船中より遙拜した。

征西將軍の宮は、其昔實に金枝玉葉の御身を以て此大任を奉し給ひ、此西陲の地に轉戰努力し給ひしも、南風競はず、遂に御病を以て此地に薨じ給ひしは誠に長き極である。

我家の系譜に據れば、遠祖河野通堯は其當時此地に渡り、西征將軍の宮に屬したことが記されてあるので、一層懷古奉公の感を深くして遙拜したが、親しく參拜する時間のなかつたことを誠に遺憾とし、左の一首を詠じて敬意を表した。

球摩川の流れに口をすゝきつゝ
はるかに仰くみさゝきの森

午後四時五十五分八代に着き、大鐵橋萩原橋の上手にて上陸、堤上を自動車にて走り、王子製紙八代工場に向つた。

十三　王子製紙會社八代工場

八代工場に着後、倶樂部にて少憩の後直ちに工場長の案内にて工場を視察した。

當工場の所在地は熊本縣八代郡太田郷村大字日置である。此工場は最初九州製紙會社の所屬で、大正十三年十月操業を開始したが、大正十五年樺太工業會社に合併し、更に昭和八年同社が王子製紙會社に合併したる結果、坂本工場と共に王子製紙の所屬となつたものである。

當工場の抄紙機は、長網百四十二吋一臺、同ヤンキー式百十吋二臺合計三臺で、當日は新聞用紙、ロール紙類を抄造して居つた。

動力は自家發電(火力)と購入電力に據て居る。暫時にして工場を辭し、午後六時三分八代驛發熊本に向つた。

尙八代には、舊城址に懷良親王を祀れる官幣中社八代宮あれども、參詣の遑なかりしは、是れ亦誠に遺憾であつた。

十四　熊本より戸下溫泉

午後六時五十二分熊本驛着、直ちに自動車に乘じ立野溫泉に向ふ、途中熊本市内、坪井町に熊本醫大内科部長醫學博士小宮悅造氏を訪問した、折から博士は御兩人共風邪にて平臥中なりとて下婢の取次を斷つたに拘らず、强ひて面會を求めて誠に失禮した。

午後八時十分戸下溫泉碧翠樓に着した。

此溫泉は立野驛から三粁五(一里弱)白川と黑川との合流地點に在りて、溪流に臨む猫額大の地であるが、閑靜である。

碧翠樓は宏壯にして設備整ひ、客室六十餘を有する溫泉旅館である。但し湯は杤木溫泉から引いて來て居るので、聊か低溫の感がある。

沐浴の後寢に就いたが、寒いので湯たんぽを入れた。

余等此溫泉に浴することは必ずしも其目的ではない、只阿蘇登山の便宜に過ぎなかつたのである。

十五　阿蘇登山

五日　晴　早朝離床食事を濟まし、午前七時廿五分自動車にて出發、坊中町を經て

彌、阿蘇登山の途に就いた、之れが所謂坊中口である。

阿蘇山と稱するものは高岳、根子岳、中岳、杵島岳、鳥帽子岳の總稱で、之を阿蘇の五岳と云ふ。現在熾に噴火して居るのは中岳である、從つて噴火口見物の爲めにする阿蘇登山は、此の中岳に登るのであるが、登山路は左の如く色々ある。

坊中口　之れは豐肥線坊中驛から登る途を云ふ。

宮地口　之れは豐肥線宮地驛から登る途である。

赤水口　之れは同線赤水驛から登る途である。

立野口　之れは同線立野驛に下車し戸下、杤木、湯の谷、千里ヶ濱等を經て登る途である。

長陽口　之れは高森線長陽驛に下車して登る途である。

中松口　之れは高森線中松驛に下車して登る途である。

白川口　之れは高森線阿蘇白川驛にて下車して登る途である。

余等の採つた坊中口の「坊中」と稱する所以は神龜の昔(千二百年前)聖武帝の勅願により阿蘇山上に觀世音の堂宇安置せられ、之に勤むる僧侶多數住居し、其坊三十六あり、當時之を三十六坊と稱してゐたが、兵燹に罹り堂宇皆烏有に歸し、時を經て山

麓に移されたので、山上の三十六坊跡を古坊中といひ、此地を坊中と稱するに至つたのであると云ふ。

今、山麓に西巖殿寺あり、當時の古物多く、後奈良天皇の宸筆に成る紺地金泥の般若經(國寶)等もあると云ふ。

午前八時十分噴火口の上り口に着いた、此處に至る迄の登山道路は迂曲することは頗りなれども、頗る立派で、勾配が非常に緩かである。

車上から一望の下に、外輪山の全貌を俯瞰することが出來て、誠に壯大な感を生じた。

噴火口の上り口に自動車の停留場がある、其附近には茶店があつて、土產物抔を賣つて居る。

夫れより徒歩で、御堂と阿蘇山上神社の前を過ぎ、熔岩の石原を徐々に登る。

途中寒風吹き荒みて雪を交へ、耳が切られる樣な感じがするから襟卷で頰被むりをして俯伏して登つた、鼻下の髭がこわばるから、何かと思つたら、息が髭に凍り附くのであつた。

彌々中岳の噴火口に着いた。立ち昇る白煙濛々として噴火口を蔽ひ、口内咫尺を辯ぜぬが、火口壁は絶壁で、其中では硫黄採取の作業人夫が出入する狀が微かに見えた。

阿蘇の噴火口は舊新に別れ、舊噴火口は南北の長徑六里、東西の短徑四里にわたり、此間に根子岳、高岳、中岳、烏帽子岳、杵島岳の五岳が東より西に相連りて突起して居る、最東の根子岳は七面岳とも稱し、山頂鋸の齒の樣で、高さ四千六百九十九尺ありと云ふ。

新噴火口は明治三十九年六月八日に一大爆音と共に噴起したものと、昭和八年二月廿四日に大爆發をなしたもので、寫眞や繪はがきで、見る噴煙天を覆ふの光景は此新噴火口の實況であると聞いた。

今活動せる部分は中岳であつて、噴火口は直徑千九百八十尺の圓形をなし、高さ四百十二尺餘ありと聞いたが、濛々たる噴煙の爲め能く判らなかつた。

阿蘇山は如此複雜なる大火山であつて、火山全體の占むる面積は百十三平方里、東西十二里九丁、南北十一里半に達し、火山として之れ程大きく、之れ程完成した標式的複成火山は、啻に此を措ひて日本に無いばかりでなく、世界にも稀なるもので、全く世界の名火山であると聞いた。

阿蘇登山の途中にて一首

立ちのぼる煙はそらにつらなりて
雲かと見ゆる阿蘇の大峰

噴火口にて雪の降るさまを眺めつゝ

星落ちて消ゆると見しは阿蘇のねの
煙にましる吹雪なりけり

午前九時十五分下山の途に就く、上り口の茶屋にて休憩、甘酒を飲みて暖を取る、時に山上の氣溫零下廿度と聞いて驚いた。

同三十分山上茶屋を發し十時宮地に着いた。

十六　阿蘇神社

阿蘇神社の大鳥居にて下車し、樓門前の清流にて洗手嗽口して門を入り、社前に拍手稽拜した。

當社は肥後一の宮で、官幣大社である。

社殿は一の宮、二の宮に分れ、祭神は一の宮に健磐龍命、二の宮に阿蘇都媛命を祭る、健磐龍命は神武天皇の皇孫である、即ち神武天皇の皇子神八井耳命の御子で、鎮西鎮撫の大任を受け、筑紫に下りて肥後に入り、阿蘇津姫を娶りて今の宮地に住み給ひしが、此地四面皆山連りて湖水なりければ、西山を破て水を其間に注ぎ給ひしに、渺々たる南北の二湖忽ち數十里の沃野となりき、此に於て即ち矢を發して宮居をトし、民に稼穡の道を敎へ給ふた、是に於て土地大に闢け、民人育る、即ち命は肥後開闢の神であると承つた。

而して當社の起源は孝靈天皇九年六月國造速瓶玉命に命じて大神を祀らせられたのが其始めである。

尙一の宮、二の宮の外に、三の宮國龍命四の宮比咩御子神、五の宮彦御子神、六の宮若速瓶玉命、十二の宮金凝神が併祀されてある。

比咩神、七の宮新彦神、八の宮新比咩神九の宮若彦神、十の宮彌比咩神、十一の宮國造

往時當社の構造は、平安朝の宮殿の制に準ひ、且つ三十三年毎に造替せらるゝの例なりしが、現今の社殿は天保より嘉永に亘り、肥後藩の造營に成りしものと云ふこ

とである。

樓門は桓武帝皇居の制を模したものださうで、頗る古風な趣に富んで居る。

殊に阿蘇大宮司は、出雲の千家男爵と共に神孫直系の家柄で、男爵に敍せられて居る、同家には其の藏する古文書多く、歴史研究の資料として珍重さるべきもの尠からずと云ふ。

社前を辭して徒歩二丁許、宮地驛に至る此處にて中村、佐藤兩君に別れ、午前十一時五分同驛を發した。

十七　歸途に就く

午後一時五十四分大分にて日豐本線に乘り換へ、二時十五分同驛を發した。

柳が浦驛に着いた時、圖らずも我社都島工場倉庫係長たる以首一君が乘車した、是れは同君急用が有つて元旦早々柳が浦へ歸鄉して大阪へ向けての歸途であると聞いた。小倉驛にては我社小倉工場の鈴木工場長、土平工場長代理石垣工務係長等が來て居られて別辭を交はし、石垣工務係長は下關迄見送らんとて同車した。

午後六時卅五分門司驛に着き聯絡船下關丸に搭じて同五十分下關に着いた、改札口で以首一君が乘車券を紛失したと云ふので彼是手間取つたが、幸ひに「ポケット」の納れ違ひであることが判つて互に安堵した。

以首一君は親戚へ立寄ると云ふので、此處で別かれた。

余等は山陽ホテルの食堂に入り、夕食を喫しながら石垣君、井澤君抔の懷舊談を聞いた。

午後八時三十分石垣井澤兩君並に折柄門司へ歸省中なりし柴崎君抔に分れ富士號に乘つて歸京の途に就いた。

一月六日　晴　朝京都迄は晴天であつたが、午前八時頃八幡驛附近より、一天俄に曇り初め、降雪頗る激甚となり大垣驛につく迄止まなかつた。

午前九時十分大垣驛着、自宅に入り少憩後、氏神縣社八幡宮次で祖先の墳墓に參詣後親戚數家を訪問し、三輪家にて休憩中、山崎大商校長の訪問を受け、午餐の攝待を共にした。

午後は不破郡宮代村に至り美濃の一の宮國幣大社南宮神社に參詣し、午後三時頃歸垣した。

夕景　吉益トク其他鄉友の訪問を受け互に久濶を敍した。

午後十時四十九分同驛發、寢ながら歸京、翌くれば一月七日午前七時四分新橋驛に到着した。

以上の旅程を約算すれば

旅行日數七日

路程往復約三千二百三十七粁(約二千十二哩——八二四里)となる。

これで昭和六年の初めに北九州を旅行してから數年後に大略九州全體を通じてとは云へぬが、南北に跨つての旅行を完了した譯である。

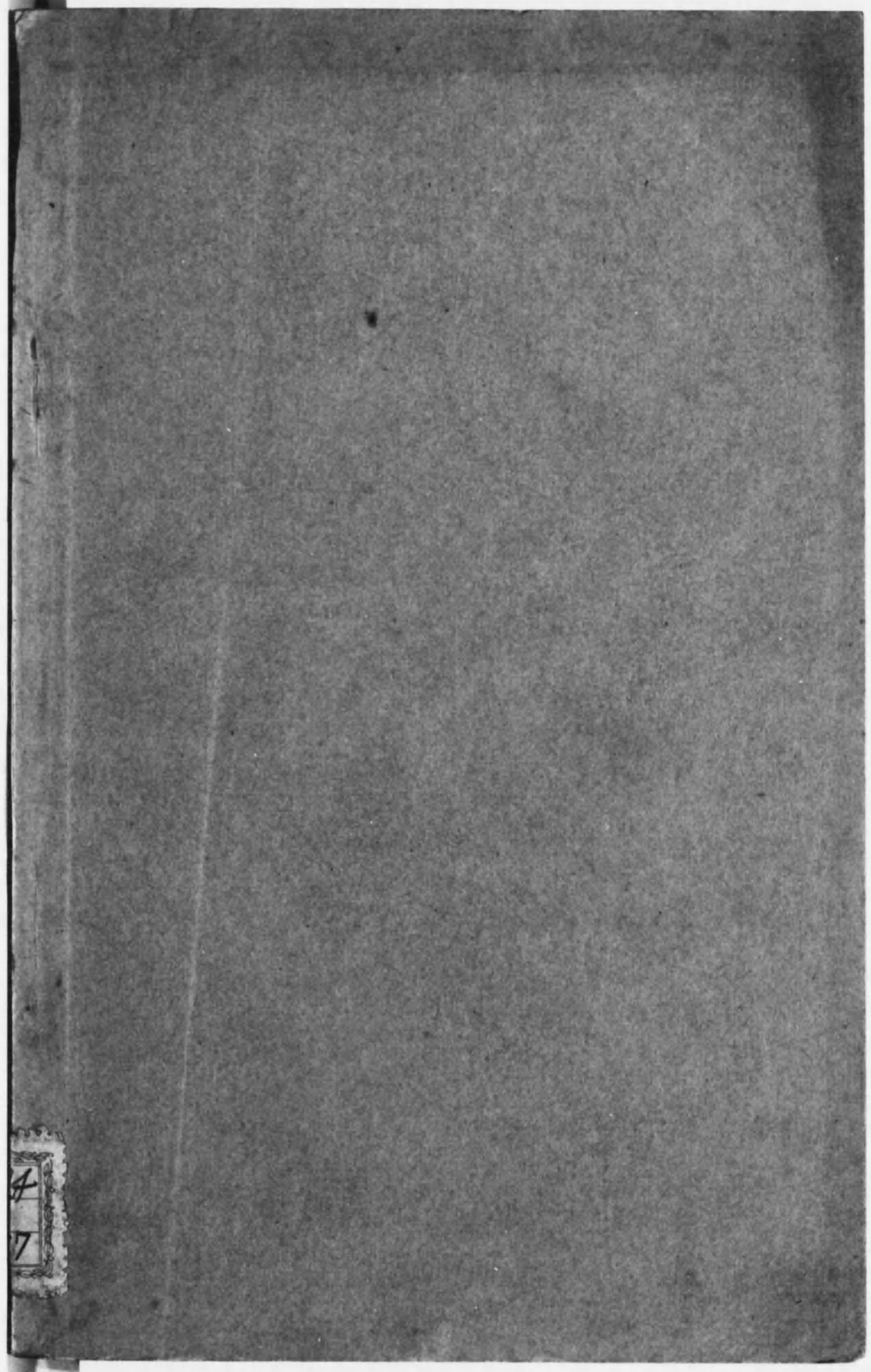
南九州の旅 畢

昭和十一年八月十三日印刷
昭和十一年八月十八日發行

（非賣品）

著者兼發行者　一柳貞吉
東京市麻布區市兵衛町二丁目二十八番地

印刷者　室伏友作
東京市京橋區築地一ノ一六

印刷所　王友社
東京市京橋區築地二ノ一六

終